

# カンボジアの笑顔を撮る

## 大槌みらい新聞



2012 平成24 年  
11月15日(木)

第3号

発行  
NewsLab おおつち  
電話 0193(55)5908  
FAX 020(4662)9611

定価：50円

## 復興への思い強く

大槌町吉里吉里に住む高校1年の釜石望鈴(みすず)さん(15)は、震災発生後から、「自分にもできることをやりたい」と被災写真の撮影に取り組んでいる。今夏には、フォトジャーナリストのカンボジア・スタディツアーにも参加して現地の人たちと交流。外の世界に触れることで、改めて地元大槌の復興への思いを強くした。

### 吉里吉里の高校生 釜石望鈴さん(15)



普段からよく撮影している吉里吉里の海辺でカメラを構える釜石さん

きっかけは、震災後にたまたま見つけたフィルム式の一眼レフカメラだった。被災した母の実家の荷物を整理していた際に、箱の中から出てきた。震災では、自宅にも直接的な被害はなかったものの、電気や水道は使えず、生活は大変だった。それでも何かを残そうと被災した周辺地域の撮影を始めた。

写真に興味を抱いたことで、新たな挑戦の機会がやってきた。中学3年のころから通い始めた放課後学校「コラボ・スクール」(運営・NPOカタリバ)で、フォトジャーナリストの安田菜津紀さんが主宰するカンボジア・スタディツアーの紹介を受け、高校生無料チャレンジ枠に挑戦。無料枠3人のうちの1人に

選ばれ、今年8月15日から11日間、カンボジアを旅した。

カンボジアでは、人の温かさに触れた。プノンペンのスラム街での移動図書館活動では、笑顔の子どもたちに出会い、何枚もシャッターを切った。ポル・ポト政権下で大量虐殺が行われた刑場跡「キリングフィールド」を訪れた時には衝撃を受けた。初めての海外旅行だったこともあり、後半からは、体調を崩してしまつたが、訪問していた村の子どもたちがおかゆを食べさせてくれた。

帰国後のレポートでは「カンボジアの人々は輝く笑顔で笑っていた。なぜこんなにも笑顔なのか?毎日毎日、生きることに必死で…私だったら辛くて笑うこともできな

## 「10年後の町」の模型制作

### 大槌高1年生、役場に展示

「津波の被害を最小におさえる町づくり」をテーマに県立大槌高1年C組(39人)が制作した復興模型「10年後の大槌町」が11月末まで町役場1階ロビーに展示されている。

模型は3×2メートルの大ききで、約3週間をかけてクラスぐるみで制作され、先月21日の文化祭「大高祭」で披露。もつと多くの町民に見てもらおうと、町役場に展示されることになった。生徒たちは町内の津波浸水状

況をあらためて調べる一方、横造紙で中心市街地の地図を作成し、漁業産業エリア、公共エリア、住宅エリアに区分け。豊かな自然を長く残してもらおうと、城山は段ボール箱で大きめに制作。さらに、交番や遊園地、水族館、スタジアム、カラオケ店など様々な施設を粘土で「建設」した。防潮堤は県計画の最高14.5メートルに対し8メートルにとどめ、避難路の確保に重点を置いている。



ウェブ版で全文を掲載しています

紙面未掲載の記事も多彩



釜石さんが撮影したカンボジアの子どもたち

くなりそう。でも、震災り周りにはみんながいる。当時を思い出すと、やはり、家族がいるから、

1人じゃないと思つたら、笑うことができた気がする」と振り返った。元々、人と接することが苦手だったが、多くの出会いを通じて、帰国後はこれまで以上に外の人たちと交流するようになった。毎月11日に、自宅2階から定点撮影してきた被災写真をカンボジア・スタディツアーで知り合つた高校生の文化祭に提供した。「コラボ・スクール」の活動の一環で、大槌を訪れた人の案内もする機会も増えた。

将来の夢を尋ねてみると「写真を撮ることに興味があります」。「プロのカメラマンになりたいの」と聞いても、無言ではにかむばかりだったが、その目はきちんと前を見据えていた。

(新志有裕)



商業

# 定まらない中心街再生プラン



町の町方地区復興計画案で「地元商店や産直売店を集約し、大槌の賑わい再生の拠点」とされる御社地周辺。土地区画整理事業で約2メートルの盛り土が計画されている。中央手前は大槌商工会プレハブ事務所

## 揺れる商店主

### 検証復興への道③

■集約候補地 駅前から御社地に  
大槌の商工業を復興する計画づくりは大震災4

大槌の復興まちづくりには不可欠な商業の再生。その核となる中心市街地「町方」の再生に向け、大槌商工会や町役場はプランづくりを急いでいる。しかし、長期に及ぶ土地区画整理事業の盛り土や防潮堤工事に、被災商業者の考えは揺れ動いている。大震災から1年8カ月たった今も再生プランの方向性は定まっていない。

カ月後にして早くもスタートした。大槌商工会(菊池良一会長、335会員)が昨年7月、会員を主要メンバーとする「商工業復興ビジョン検討委員会」を立ち上げ、計5回の議論や会員の意向調査を踏まえ「進め未来へ!! 生まれ変わる大槌経済―震災前より魅力的でにぎわいのあるまちをめざして」と題するビジョンを策定した。

商業再生の核となる町方についてはJR大槌駅前周辺にテナント施設を建設して店舗を集約、公営施設や医療福祉施設、公営住宅の誘致も提言した。

町役場はこのビジョンを受け、より具体的な「町産業復興アクションプラン(行動計画)づくりを目指すし、商工業者の意見を聞く「中心市街地復興検討会」を今年5・6月に4回開催。

商業集約の候補地は、JR山田線復旧時期が不透明なこともあり、大槌駅前ではなく、大槌駅から北東約350メートル離れた史跡「御社地」周辺に変更され、買い物客が個店を回遊できるパティオ形式(中央に広場をもつ商店街)が有望視された。

### 「元の場所」で過半数

しかし、検討会と併行して行われた商工業者の意向調査(回答165社)では、将来の営業場所として「元の場所」と「元の場所近く」を望む声が過半数を占め、町方で営業していた事業者に限っても4割を上回った。

町方での商業集約の形についても、震災前と同様の「沿道型」が4割強を占め、パティオ型は2割にとどまり、検討会での議論と

は違った意見が目立った。町方で中心街再生という総論ではほぼ一致したものの、各自がどう対応するかとなると意見が分かれてしまい、具体的な方向性は絞りきれなかった。

このため、町は9月、町方の商工業者らとあらためて懇談したが、①御社地周辺に公営商業施設を建設する②災害公営住宅に商店が入るテナント階を整備する③土地区画整理区域内での自主的再開など5つのメニュー提示にと

### 「焦らず仮設店舗で

ども、あらためて意向調査を現在行っている。年度内のアクションプラン策定を目指すのが、方向性を絞り切るのは難しいとされた。

これらプラン策定に向けて開かれた中心市街地復興検討会の参加者は毎回20人台、9月の懇談会も「集まりが悪かった」(町商工労政課)といわれ、プラン作成への関心の低さは否めない。菊池会長は「被災会員は

### 異業種若手が連携

商業再生プラン作成が行き詰まる一方で、異業種の若手事業者らが連携して新商品開発など検討する議論や、仮設商店街の商店主らが「次も一緒に」と新たな商いの場を求め、動きも生まれている。

被災した中小企業がグループとして取り組む施設・設備の復旧・整備に国と若手県が4分の3を補助する「中小企業グループ補助金」の5次公募が今月スタート。その採択を目指し、飲食店や住宅サービス、観光・交通など異業種の若手事業者らが「大槌若旦那会(仮称)を立ち上げた。旬の地場産品を生かしたグルメ商品の共同開発・販売や機材・販路共有化を模索する週2回の議論は深夜に及ぶ。

吉里吉里の石材店を津波で流された芳賀光代表(38)は「グループ補助金は欲しいが、失われた街の未



国の中小企業グループ補助の獲得を目指し議論を重ねる「大槌若旦那会」(仮称)の若手事業者ら=吉里吉里

(商業再建の方針が現実問題として)まだピンと来ていないのではないかと。震災後から再建方針が変化しており、区画整理事業の工事が始まれば今後変わる可能性がある」と流動的な面を指摘。

「出来るだけ早く店舗を再建できる時期を示してほしい」と町に要望しつつも「最終的には(行政に頼らず)自主再建を基本にして焦らず仮設店舗で頑張るしかないだろう」と付け加えた。

来を考えるのも楽しい。それぞれの商店が少しでも早く復活していくことが大事と訴えた。

大槌北小学校の校庭に昨年暮れオープンした仮設商店街「福幸きらり商店街」(39事業者)でクリーニング店を営む同商店街自治会副会長の佐々木嘉一さん(42)は浪板仮設団地在住の20人も「次も集合体で一緒にやりたい」と、観光バスも呼び込める「道の駅」のような商業施設を国道45号バイパス沿いに設けられないか今後検討していくことになった。

佐々木さんは「震災前の商店街は店が歯抜けのようになつてしまい、既にじり貧状態。そのまま元の場所に戻っても厳しいし、戻るにも5年から7年はかかるだろう。理想は御社地(への集約)だろうが、待たせられるだろうか。正直なところ見えない」と話した。

(松本裕樹)